

福見先生の思い出

佐藤友三*

先生が昭和45年2月23日に郷里の松山市で亡くなられ、先生の思い出を私が書くことになりましたが、私が先生の訶に接したのはわずか2カ年と7カ月でした。それは旧学制で天文学科の中期の春、昭和9年4月中旬から翌10年の3月末まで暦計算の講義を受けた期間と、その後10年を経た昭和19年4月から先生が停年退官された終戦の年の昭和20年10月まで、天文台で先生の監督の下でFK3基準星系の恒星視位置の計算を行なった期間だけだったのです。このような次第ですから、天文台に私が移った頃は戦時中で、先生が暦の独立推算の立場にあって、仕事の面のみでの先生の思い出がほとんどです。あるいはこの方が却って先生の真面目を語ることになるのかも知れません。

はじめに、私の学生時代の先生のことについて述べますが、毎週金曜日の午後三鷹から麻布狸穴の天文学教室に来られ、一日の欠講もなくみっちり2時間にわたり暦計算の講義と演習の指導をされました。長いことバリーに留学されたと聞いていましたが、その通りの仲々に洗練された感じの先生で、講義もフランス流のやり方のところも織り交った、懇切丁寧なもの。今この講義のノートを開いてみますと、まず、Interpolation (Extrapolation, Variation, Inverse interpolation, etc), Time (System of the time, Mean time, Sidereal time, Rising and setting of the heavenly bodies), Star place (Mean place, Apparent place), Eclipse (Lunar and Solar eclipses, Chart of the solar eclipse, Determination of terrestrial longitude with the solar eclipse), Occultation (Prediction, Discussion of the longitude with the occultation, Investigation of the lunar elements), Transit of Mercury and Venus (Theory and prediction), Occultation of planets by the moon (Theory and prediction) の諸項目に及んで、これらの各項目の終りにそれぞれ当時までに発表された新しい論文の紹介がついていて、215頁に達しています。もちろん睡魔に魅せられて、後で訂正した所も数箇所ありますが、Variation at epochに関する先生の御教示が、後年私が天体暦に関係して大変役に立ちました。演習も、私共が提出した計算結果の誤を逐一訂正されて再計算された上で私共に返して下さったもので、お引受けされた事柄は最後まで責任をもつ



て完璧に行なうという先生の御性格が躍如としていました。その後、約9年近く私が鉛直線偏差の仕事に従事し、その間に、昭和16年9月の石垣島、および18年2月の厚岸の二つの皆既食の切触時刻の観測で、先生の子報結果と観測結果とを比べたことがあります。この時期は今次の世界大戦で欧米の天体暦のすべての輸入が途絶え、切触時刻の子報は先生がNewcomb, Brownのそれぞれの原表と章動の長、短両項を原式から独立に推算されたものだったのです。石垣島の場合は私としても初めての日食の経験でしたので、予報値の10秒前になっても、太陽が鋭い鎌のような形までは欠けるが、あと10秒で果して予報通り皆既が始まるのかな、予報が合っているのかなと、今考えると真に不遜なことを考えて切触時刻の観測をしたものでした。結果は共に1秒以内で一致していました。ことに厚岸の場合第1切触時刻のO-Cが1秒の10分の1まで一致していたため、この観測方法を考案した当時の台長の関口先生が、予報値の時秒100分の1までを先生に求め言下に無意味だといわれました。また日本学術研究会議でこの厚岸での観測の概略報告が行なわれた時、中心帯の予報計算について発表された時の先生の自信に満ちた説明と、蘊蓄の深さから受けた感銘は、その後、私が食の予報を行なうに当たっての一つの心構えとなったものです。

昭和14年8月から、私が天文台のいわゆる「タイム部屋」の仕事に関係するようになって、もっと身近に先生の仕事の面での日常に接するようになり、先生が神宮暦の編纂、天文台の観測遂行のための基準星系FK3

* 東京天文台

の恒星の視位などの計算を、昭和 15 年に諸外国の天体暦の輸入が止ったため、独立に行ない、また他面図書、天文台の出版物の校正などに多忙な日々を送っておられることを知りました。先生の校正の完璧さと英文の洗練さはよく先輩の石井重雄博士から聞かされたものでした。

昭和 19 年 4 月から実際に私が天文台に移り先生の下で FK3 基準星系の三鷹子午線通過時の視位置の計算を手伝うことになり、先生の専門部面で、はじめて直接に接するようになったのです。その頃の先生は天文台に泊りがけで暦の独立推算をやられていました。したがって仕事の面だけでの先生とのお付き合いで、謹厳な感じを受けたものでした。先生は任かせた仕事に対しとや角いったことは一度もありませんでした。昭和 20 年末から私も天体暦の独立推算をやることになってみて、当時の先生の御心労のほど如何ばかりかとの感を深くしました。

このように、先生とはほとんど暦計算面で、その上短かい期間でのお付き合いでしたが、その間でも、一度だけ先生のいいなりにならなかったことがあります。それは神宮暦の編纂のことでしたが、これの校正は数字の間違いはいわずもがな、活字の字体、組の体裁、印刷の色の一様さなどのすべての点に注意して完璧な暦を作ることが先生の要求でした。数字の誤植がなければ、それで充分と考えていた私には、到底納得が行かなかったので判然とお断りしましたが、しかし先生はあっさりと承知して下さって、私の方が戸惑いした次第でした。間もなく先生が退官なされ、以後天体暦の独立推算と暦象年表の編纂をやる立場になって、いやという程に校正に気を使うようになり、あの時先生があっさりと承知なさったのは、すべてを見通した上での、私に対する頂門の一針であったと、いたく反省した次第です。当時、私よりも先生に親しく指導を受けていた前山君も昭和 38 年夏に他界し、先輩の石井博士、堀鎮夫氏も、さらにそれ以前に鬼籍に入られていますので、仕事の面以外の点で先生の思い出を述べて下さる方もいないようですが、先生の在任中「こよみ部屋」以外の部屋の諸先輩から伺ったことですが、非常に後輩に思い遣りの深い先生だったそうです。

最後に、先生の略歴を述べますが、先生は明治 39 年 7 月に第一高等学校を卒業し（私が先生から聞いたことですが、この時夏目漱石に英語でほめられたことがあったのだそうです）、同年 9 月に東京帝国大学理科大学星学科に入学し、明治 42 年 7 月に卒業し、同時に大学院に入学し理論星学を専攻し、翌 43 年 8 月末日に大学院を去って欧州に留学し、明治 43 年 8 月から大正 10 年 2 月下旬までの間、主として仏国巴里に留まって、ソルボンヌ大学で、ポアンカレ、ヴェシオ、ピカル、ダ

ルブー、ギシャル、ボレルの諸碩学から純力学、微分方程式論、幾何学、函数論などの教をうけ、同時に、コレヂュ・ド・フランスにおいて、アンベル、アダマルの碩学について数学の研究をしておられた。大正 11 年 10 月上旬に東京天文台に着任し、小倉伸吉、平山清次、松隈健彦の諸先生に次いで編暦主任となって爾来退官された昭和 20 年 10 月まで神宮暦の編纂と天体暦のことをなされ、その内、大正 12 年から理学部に關係して暦計算の講義を退官までなされた。この間昭和 8 年のロソップ日食に出張され、また多忙な中で、昭和 14 年 6 月下旬から 16 年 3 月末まで天文台長事務取扱いをお引受けしています。退官後も引続き、独立に神宮暦の推算をおやりになって、在職中と相も変らぬ完璧な神宮暦の編纂をされてきました。ほとんど半世紀に近い間、神宮暦をおやりになっていた訳です。

先生はこの外に昭和 5 年から 6 年にかけて共立社（東京）から発行された続軌近数学講座の第 6・第 13 巻に球面天文学を執筆されています。この外に天文月報第 19 巻 5 号、第 26 巻 10 号、第 27 巻 7 号にそれぞれ日食の記事および月の位置の事柄についての論文があります。

学会だより

天文教育に関する懇談会

春季年会のさい、表記の懇談会が開かれます。天文教育に関心のある方は、ふるって御参加下さい。

時と所 5月13日 13時より、3階B会議室にて。

テーマ 1. 天文教育の必要性、2. 理科教育の一部としての天文教育、3. 天体の観望と観測の実際、4. 天文教具について、5. 天文用語について、6. 今後の活動について、7. その他。

詳細は佐藤明達氏（大阪市立電気科学館）または平瀬志富氏（東京都立戸山高校）にお問い合わせ下さい。

第3回 月・惑星シンポジウム

例年秋に行なわれている宇宙航空研究所主催の月・惑星シンポジウムを、今年は時期を早めて下記により開催いたします。

日時 昭和 45 年 6 月 18 日（木）、19 日（金）

講演を希望される方は、講演者（所属・身分）、講演題目、要旨（400字以内）、希望講演時間を 5 月 20 日（水）までに世話人のところへお届け下さい。

シンポジウム世話人 東大宇宙航空研究所 高柳和夫
〒153 東京都目黒区駒場 4-6-1

Tel. (467) 1111 内線 484 または 495

春季年会の期日と場所の変更 年会プログラム参照